

地理学研究と地理教育との間

櫻井明久

駒澤大学文学部

本稿は、もともと小、中、高等学校における教育経験のなかった筆者が、「地理学研究と地理教育」との間で行った自身の地理教育の試みを反省したものである。筆者は社会科教育講座所属となり、急に小学校社会科の授業方法を教授し、小中高の現職教員の教育研究指導に当ることになった。そのため、地理学研究と学校教育のなかの地理教育との違いにも悩むことになった。こうした経験をもとに、地理教育を考えてみたい。

地理学を学んでいる教職志望の多くの学生は、地理教育は地理学を易しく教えることと理解しがちである。しかし、地理学と教科科目・社会科ないしは地歴科地理との間には大きな違いがある。そのことを認識したうえで、地理教育にあたる必要がある。

学校現場経験のない筆者が試みることができたのは、一つは、現職教員の研究仲間の研究を評価したことであり、それぞれの仮説に沿ってデータを収集し、それをテコに具体的に児童・生徒の認識を推し測り、その変容から授業を評価し、地理教育などの授業方法・内容の改善の手がかりを得るという試みであった。もう一つは、自身が地理学で学び、フィールドワークで感じてきた地理教育の改善提案を、とくに教材化の試みの中で行ってみたことである。最近の地理教育については、筆者自身の大学における専門科目、教養科目、地歴科教育法の講義科目で試みた自由記述による授業の感想・意見、及び期末試験・レポート評価から、地理教育改善の手がかりを得ようと試みている。

また、至らなかつた筆者の地理学研究ではあるが、そのフィールドワークから得た地理教育改善のアイデアを考えてみた。

I はじめに

筆者が学会で特色ある活動を行ったこととは、周囲の皆様の評価で判断すれば、地理教育についてであるらしい。今回の講演でも周囲の皆さんは地理教育について話してはどうかとお勧めくださるので、どうにかできそうな話題を探し、本テーマ「地理学研究と地理教育との間」を考えることにした。

この態度こそ筆者の研究姿勢の問題点であり、実は、宿題を出されると、少々荷が重いなと思いつつもながらもそれをするし、置かれた立場からは、また分担上何をすべきかと考えてしまう。そんな姿勢で研究生活を送ってしまったことを若手研究者である皆さんの前でまずは反省をしておきます。若手の皆様には是非もっと主体的に研究活動を

行っていたきたい。

ところで、筆者はまず17年前に小学校社会科・生活科から手を引いたのを皮切りに、とくに最近10年間、着々と「地理教育」撤退作戦を実施し、教科書執筆（水越ほか、2002;山本ほか、2002;山本ほか、2003）からも、学習指導要領作成協力（文科省、2010）からも撤退し、終に本年2015年度には駒澤大学でも教科教育法の授業担当を免れたことでほぼ撤退完了となった。こうした撤退後のものが地理教育を語るとすれば、地理学研究と地理教育との間で何に違いを感じ、悩み、地理学研究からは何を教育に持ち込みたいと考えたかなど、筆者の地理教育への試みの反省を土台として話さざるを得ない。

これまでの会長講演が歴代の立派な地理学研究者の自らの研究成果を話されたことと比べ、いさ